

十ハリツトリの 灯油の重さ



高橋秀雄
小泉澄夫・絵

外の暗さが忍び込んできそうで、今日は早くカーテンを閉めた。それでも外の音が気になって、テレビにも集中できなかった。

冷たい空気が顔にあたった。ドアが開いたと思った。起き上がって、ドアのほうを振り返る。父さんが帰ってきた

のだろうか。階段の靴音にも耳をすましていた。一度もかかとを引きずる父さんの靴音はしなかった。

そんなときの電話の音はけたたましかった。大嫌いな地震が来たときみたいに、立ち上がってうるうるしてしまった。見渡すと、こたつカバーに、電話が半分隠れて鳴って